

人の心すなほならねば、偽りなきにしもあらず。されども、おのづから正直の人、などかなからん。おのれすなほならねど、人の賢を見てうらやむは尋常なり。至りて愚かなる人は、たまたま賢なる人を見て、是を憎む。「大きな利を得んがために、少しきの利を受けず、偽りかざりて名を立てんとす」とそしる。

おのれが心に違へるによりて、この嘲りをなすにて知りぬ、この人は下愚の性移るべからず、偽りて小利をも辞すべからず、かりにも賢を学ぶべからず。狂人の真似とて大路を走らば、則ち狂人なり。悪人の真似とて人を殺さば、悪人なり。

驥を学ぶは驥のたぐひ、舜を学ぶは舜の徒なり。偽りても賢を学ばんを賢といふべし。

◎口語訳

人間の心は、素直でないから、偽りが無いというわけにもいかない。けれども、たまたま正直な人が、どうしていないことがあるのか。自分が素直でないのに、他人の賢いを見てうらやむのは、世間一般のことである。極めて愚かな人は、たまたま賢い人に会うと、その人を憎む。「大きな利益を得ようとするために、少しの利益を受けないで、偽って名を上げようとするのだ」と、非難する。

自分の心と一致しないことを理由に、このような悪口を言うのでわかってしまう、この人は愚かな本性で賢く変わることができず、偽って小さい利益さえ辞退することができないし、かりそめにも賢人のまねをするのでできない。狂人のまねだといって大路を走るならば、とりもおさず狂人である。悪人のまねといって人を殺すのであれば、その人は悪人である。

千里の馬をまねる馬は千里の馬の同類であり、舜をまねる者は舜の仲間である。偽ってでも賢人を学ぶような人を賢人といってよいのである。

八になりし年、父に問ひて言はく、「仏は如何なるものにか候ふらん」といふ。父が言はく、「仏には人のなりたるなり」と。又問ふ、「人は何として仏には成り候ふやらん」と。父又、「仏の教へによりてなるなり」と答ふ。又問ふ、「教へ候ひける仏をば、なにが教へ候ひける」と。又答ふ、「それも又、さきの仏の教へによりて成り給ふなり」と。又問ふ、「その教へ始め候ひける第一の仏は、如何なる仏にか候ひける」といふ時、父、「空よりやふりけん、土よりやわきけん」といひて、笑ふ。

「問ひつめられて、え答へずなり侍りつ」と、諸人に語りて興じき。

◎口語訳

八つになった年に、父に尋ねて、「仏とはどんなものでございましょうか」と言った。父が答えて、「仏には人間がなっているのだ」と言った。また尋ねて、「人間はどうやって仏になるのでしょうか」と聞いた。父はまた、「仏の教えによってなるのである」と答えた。そこで、また尋ねて、「その教えてくださいますた仏を、何者が教えましたか」と聞いた。父はまた、「それもまた、前の仏の教えによって、仏におなりになったのである」と答えた。また尋ねて、「その教え始めなされた最初の仏は、どんな仏でございましょうか」と言うとき、父は、「天から降ってきたのであろうか、土から湧き出たのであろうか」と言って、笑った。

「問いつめられて、答えられなくなっていました」と、人々に語っておもしろがった。